

鹿角の絞り

—布を二つに畳んで絞る—

鹿角の絞りの意匠その1 立 柵 絞

この染めは鹿角の花輪でムラサキやアカネで染められていたものですが、このテクニカルノートは藍で鹿角の意匠を染める方法を紹介するものです。

ここではその中でも、立柵絞（立涌絞）の技法について話をします。

鹿角の絞りの特徴の一つは布を二枚合わせにして一緒に絞るやりかたにあります。この絞り方では、手間はかなり省けますが、使える技法は制限されます。二枚合わせと言っても、鹿角の絞りでは布幅を二つ折りにして二枚合わせにして絞ります。そのため、布幅の中心に対して左右対称の文様ができます。このやり方で、立柵（涌）の他、大柵や小柵、松皮菱の文様が染められます。これ

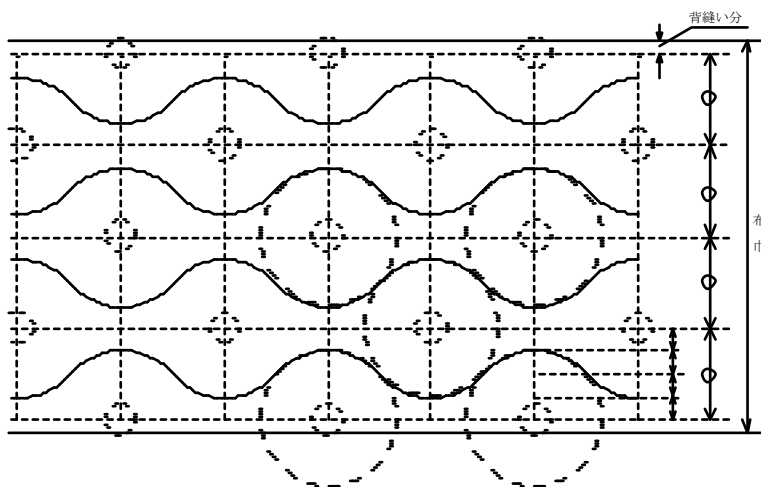


らの染めは本来ムラサキやアカネで染められてきたものですが、秋田県立博物館のワークショップでは、この意匠を藍で染めています。

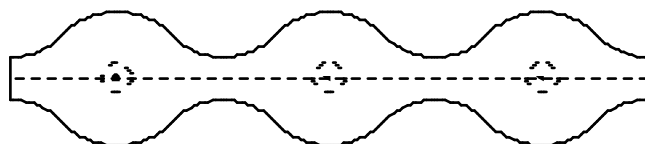
この立柵（涌）の意匠は、縦方向の波線が左右反転しながら4本横に並んだ模様です。そして、波線と波線が開いて広がったところに、丸い巻き上げ絞りが入ります。

デザインは凡そ左図のような割付が基本になりますが、周期を長くしたり、曲率を変えたりする事により様々なバリエーションが生み出されます。

絞りの下絵は型紙を用いて描きます。型紙を作るためにはまず布巾にあわせて原図を描きます。そして原図を厚紙や薄板に写して型紙を作ります。

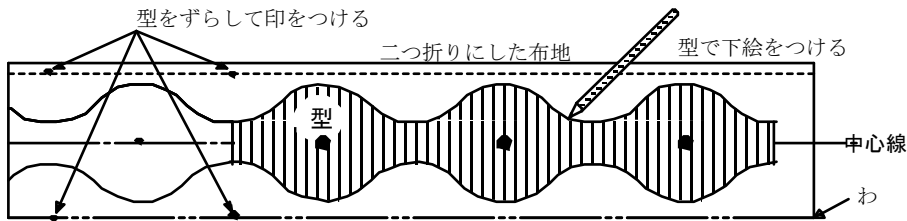


・意匠の割付



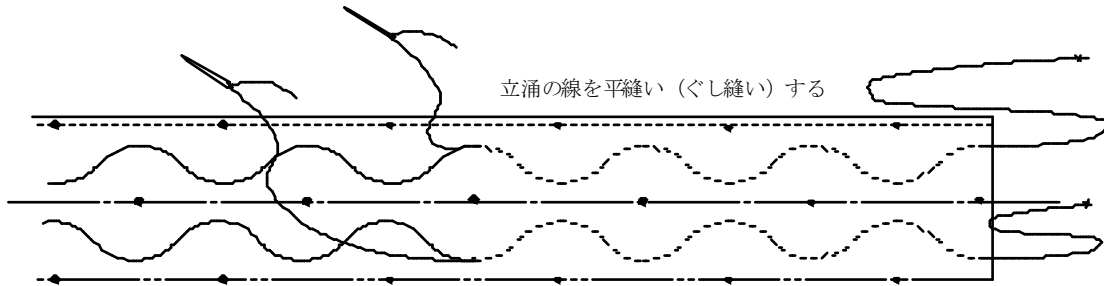
・意匠の割付をもとに型紙を作る

・下描き



布幅を二つにたたみ、背縫いの縫い代分（図中心線で示したところ）を別にして、中心に合わせて型を置き、印をつけます。下絵は水で消える青花ペン等で描きます。

立涌の線を二枚重ねで縫う



3 m程度の丈夫な糸を縫い針に通したものを二本準備し、立涌の線二本を、それぞれ糸の長さいっぱいまで縫います。針目は少し大きすぎる位の6～10ミリメートル程度で縫います。針目は大きくなるほど模様が派手になります。

巻き上げる

糸いっぱいの長さを縫ったら、次に立涌の線の中の巻き上げを絞ります。この時中央の巻き上げ絞りは二枚一緒に絞らず、一枚ずつ両側から絞ります。布の耳の背縫いの部分は、縫い代を内側に折って二枚ひとつにして絞っても、一枚ずつ別に絞ってもかまいません。巻き上げ絞りにする粒の中心にかぎ針を掛けて軽く布をひき、尖らせた布を粗く巻き上げます。先端から1 cm程度を巻き上げると直径2 cm程度の巻き上げ絞りができます。この程度の大きさが標準的ですが、もっと大きな円でもかまいません。円が大きくなるほどデザインは派手になります。

縫い糸を引き締め、繰り返す

縫った部分の巻き上げ絞りができたら、縫った糸を丁寧に引き締めます。そうすると糸が出てくるので、またその糸いっぱい縫い、巻き上げ絞りをして糸を引き締めることを繰り返します。このようにして着尺分を端から端まで縫い通し、絞り上げます。

藍で染める・絞り糸を解く

この染めでは立涌の線と巻き上げ絞りの小円をくっきり出すとともに、地にきれいな斑を作り出します。

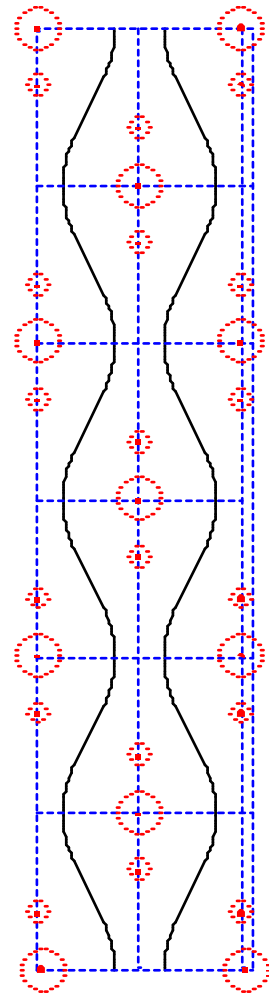
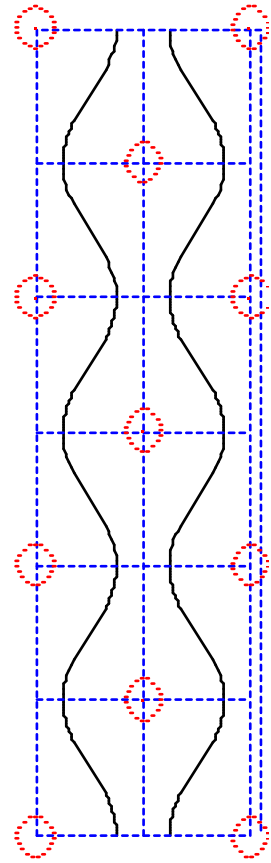
藍染めに先立ち、絞った布は充分水に漬けます。次に布の水気を切りますが、絞って水を切ると絞り糸が切れるので、乾いたタオルなどで押さえて水分を取ります。水を含んだ布は重くなり、持ち上げただけで糸が切れることもあるので注意することが必要です。

このとき布に残る水分が多いと染め模様がぼけるので、よく水を切ります。

最初の染めは弱めの藍に入れて縹色程度に染めます。染めたものはタオル等で叩いて余分な水分を取り空気を含ませて素早く発色させます。

二回目の染め以後は順次強い藍で染めていきますが、一回目と違い布には水気を多めに残して染めます。そうすると濃色が強く襷の中に入らないので濃淡の斑が作り出され、これがおもしろい模様になります。

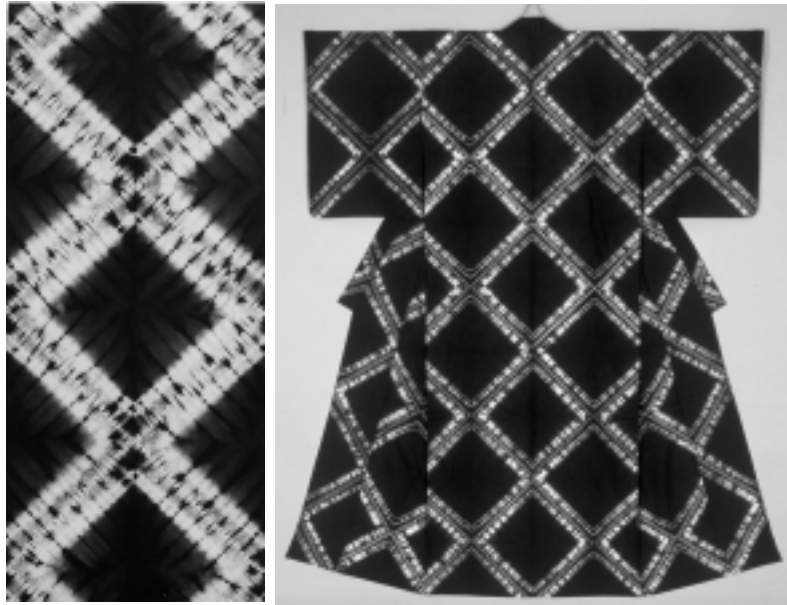
染め上がった布は、酢水で中和してよく水洗いし、乾燥させてから糸を解きます。慣れた者は、糸の解き方を考えた上で絞っているので、手際よく絞り糸が解けますが、初心者は絞るときに、解けるのが心配で、必要以上にしっかりと括るので、絞りよりも糸解きが大変な作業になります。



鹿角の絞りの意匠その2 大 柵 絞

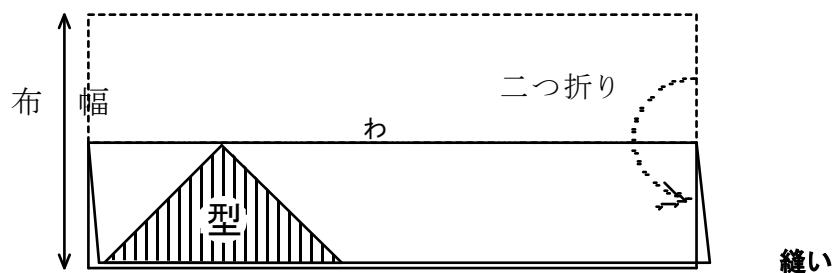
大柵は布巾いっばいを対角線とする正方形の意匠で、夜具地や下着に用いられたものが見られます。

大柵も、前回紹介した立涌絞りと同様に布を二つ折りにして絞ります。大柵絞りが立涌絞りと異なるのは、背縫いの縫代分を考えずに絞ることです。厳密に背中模様を合わせるためには縫い代分を考えなければなりません。模様が大きく、背縫いの模様合わせにそれほど不都合を感じないため、絞り易さを優先して縫い代をとりません。

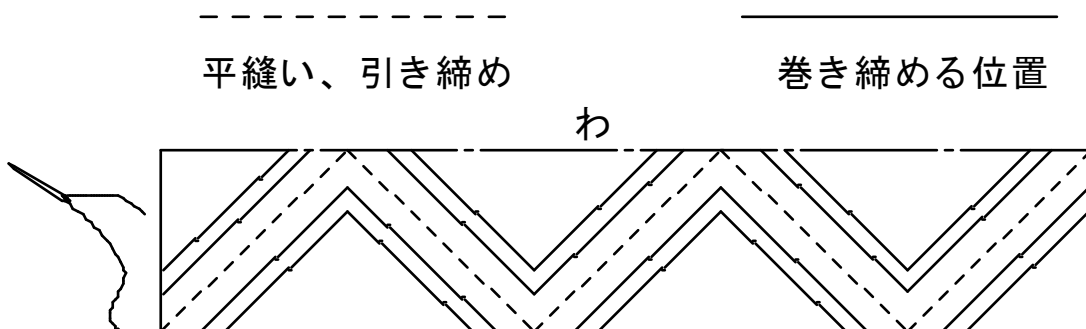


下描き

布幅を二等分に外表にたたみ、図のような直角二等辺三角形の型で端から端まで大柵の文様を青花か代用青花で下描きします。



丈夫な手縫い糸を縫い針に通し、二本取りにして2 m程度つけたものを一本準備します。準備した縫い針で、二枚重ねの布の中いっばいに描かれたジグザグの線を端から糸の長さいっばい縫います。浴衣地のような薄い木綿では少し大きすぎるほどの6~7 mmの針目で平縫いします。ジグザグ線の角に針を出さないように縫います。その方が模様の角がシャープに仕上がります。



縫い糸を締める

糸の長さいっぱい平縫いをしたら糸をざっと引き締めます。この時、針を持って糸を引っ張って締めないようにします。針を持って糸を引くと、針の穴のところで糸が痛むので、作業途中で糸が切れる恐れがあります。美しい絞り模様を作るためには、縫い目が整ったひだになるように糸を引き締めることが大切です。

そのために、まず針の後の部分で糸を二本まとめて引き輪に結んで鉤に掛けて固定します。

この状態で、縫い始めの結びこぶに近い部分から布を順次結びこぶ側に送り込むように糸を引き締めていきます。縫い線に対して直角方向両側から布を引っ張りながら布を寄せていくと整ったひだになります。

一通り布を送り込んで糸を引き締めたら、端からもう一度縫い線の両側から布を引っ張って伸ばして行きます。そして再度布を送り込んで糸を軽く締めます。最終的に全体を締めるので、この段階では軽く締めておきます。

また縫う

糸を引き締めることによって出た糸で続きを縫い、糸いっぱい縫ったら、また先のようにして糸を引き締めます。これを繰り返して、1.3mの布を端から端まで縫って糸を締めます。

全体を縫って、ざっと糸を締めると縫い目がまっすぐに通って、縫い目の両側に襷のたまったひれが左右で半分ずつずれながらたくさん並ぶかたちになります。

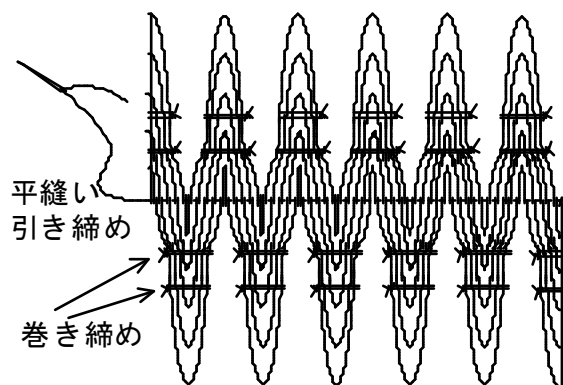
括る

次に左右に出たひれ状の部分それぞれ2ヶ所ずつ糸で巻いて括ります。括る前に、もう一度ひれ状の部分の先端を引っ掛けて襷を整えます。その状態で、縫い目から1.5cm～2cmあがった所をしっかりと指で保持し、太めの糸で2回巻いてしっかり締めて結んで止めます。更にそこから1.0cm～1.5cm上がった部分を同様に太めの糸で2回巻いて引き締めてから結んで止めます。

ゆるまないように糸を巻いて締めて結ぶには、糸の結びこぶを引っかけて固定する道具を用います。

縫い糸を強く引き締めて止める

全部括り終えたら、最終的に縫い糸を切れない程度にしっかり締めて止めます。



染める

染め方は立涌絞りを染める時と同じように襷が染めむらになるように染めます。仕上げ方も同じです。

大柵紋のアレンジ

針目を2cm程度に大きくし、柵の中心に巻き上げ紋を作ると、白場が増え、斑が大きくなり模様がずっと派手になります。針目が大きくなるほど、襷をきれいに整えて糸を引き締めることが重要になります。

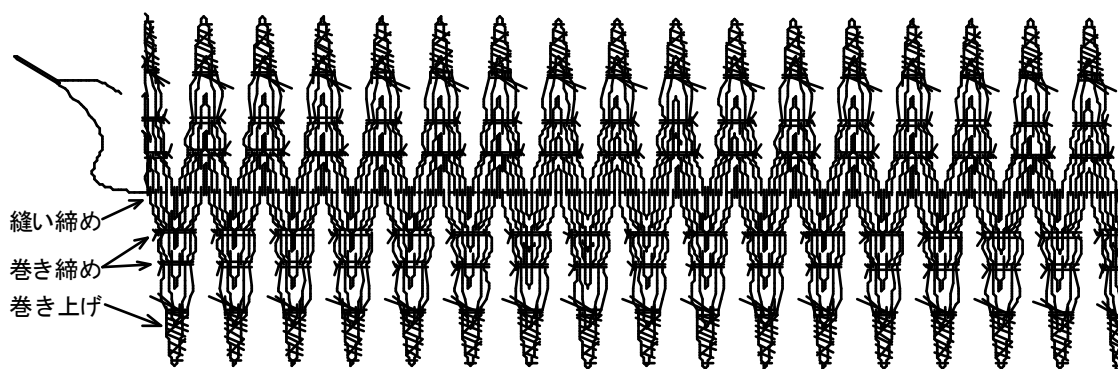
また、縫い線を稲妻型にすることにより松皮菱の意匠を染めることもできます。

前述した大柵紋では平縫いの針目が6~7mmであったが、これをアレンジして針目を縫う。縫い始めは布端から半針目分(1cm)入ったところから針を入れる。角へは針を出さないように、布端から1cm手前で角で折れた次の縫い線へ移る。型を針目の位置を入れた定規にして、布に針目の位置を下描きした方が仕事楽である。

布を送り込んで糸を締めるときは平らな作業台の上で行い、襷をできるだけ規則的にきれいに整えて行くことが大切である。糸を引き締めると縫ったところが2cm巾できれいに畳まれていくことになる。

柵を全部縫ってざっと引き締めたなら、前述の基本の大柵の紋のようにひれになった部分の基部を二ヶ所縛り、柵の中心になるひれの頂点部分を巻き上げて絞る。ひれの基部の縫い締め線から基部を縛る二本目の糸までの巾、絞り残す部分の巾、頂点部分を巻き上げる巾の割合は、およそ1:2:1位を基本にしている。全部絞り終えたら、柵を縫った縫い糸を最終的にきちっと締めて、結びこぶを作って止める。

染め方は、基本の大柵紋と同じである。染め作業で乱暴に扱うと、縫い糸が切れる恐れがあるので、縫い目がのびないように糸を掛けて編んでおく安全である。基本の大柵の場合も縫い糸が切れる恐れは同じであるが、文様の関係で余分の糸をかけると目立ってしまうので、これを行わない。



鹿角の絞りの意匠その3 小 柵 絞

小柵は前回紹介した大柵と同様の正方形の意匠ですが、その名に示されるように大柵に比べて小振りの模様です。大柵絞では布巾いっばいを対角線とする正方形のモチーフが繰り返されるのに対し、小柵絞は対角線の長さが布幅の3分の2になる正方形のモチーフが間隔を置いて繰り返されます。



これらの模様を「柵」と呼ぶのは、正方形を穀物などを量る升の形に見立てているためです。また、貨幣を数えるための銭升（ぜにます）という道具がありましたが、これにも格子模様が見られます。このことからマス（升・柵・升）は豊かさ、富裕さを象徴する模様とされてきました。刺し子の模様のひとつにもマス刺しと呼ばれるものがあるそうです。

大柵絞は大柄で、着物にするには少々難しい模様ですが、小柵絞のほうは模様が小振りな分だけおとなしい感じで、着物にも用いやすい模様です。

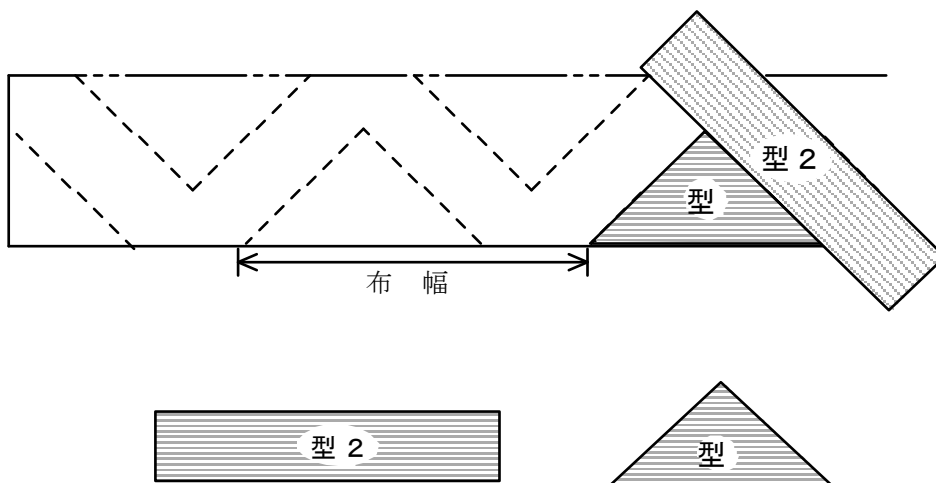
この絞りはつぎのようにして染められます。

最初に文様の型を作ります。ここで用いる型は長い辺の長さが布の幅の3分の2の直角二等辺三角形です。布幅が変われば型の大きさも変わります。材料はあり合わせの厚紙で十分です。

次ぎに用布を幅半分に折ります。

用布を幅半分に折ったら、図のように直角二等辺三角形の型をあてて縫い締め線の線を下描用の染料で描きます。

二つに折った布の両側に三角形を描いていきますが、同じ側では三角形は布の幅で繰り返して描かれます。すなわち、同じ側では模様の始まりから、次の模様の始まりまでが布の幅と同じになるように描いていくということです。反対側の三角形は、こちら側の三角形と三角形の中央に入るように描きます。三角形の型は間隔を計って送っていてもかまいませんが、型2を準備すると能率的に仕事が進められます。



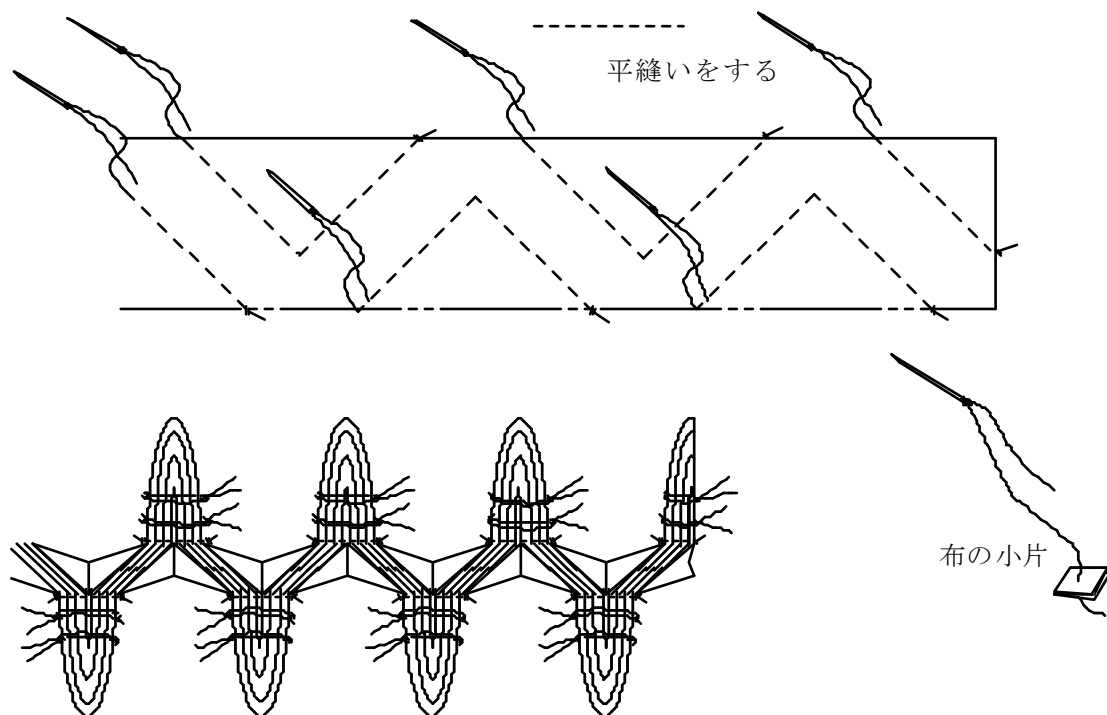
下描きが出来たら、図のように三角形の2辺を平縫いします。針目は6～7mmが標準です。このまま絞って染めると、縫いはじめと、縫い終わりが、布の重なりが無いので、染料が入ってしまい模様がぼけます。これを避けるためには、布の小片を4つに畳んだものを縫いはじめと縫い終わりに通して縫いつけます。

針を5～6本準備して縫っていき、針が無くなったら、最初に縫ったところを引き締めて止めて、その糸と針で次を縫います。これを繰り返していくと縫い糸が無駄になりません。

大樹紋の時と同じように三角形の頂点に針が出ないように縫います。

全部縫って、糸を引き締めて止めたら、縫い締め線の上の方を2カ所糸で固く括って止めます。位置は凡そ図のようなものです。

縫い糸を一々切らずに、布の両側の三角形をそれぞれ全部1本の糸で縫い通して引き締める方法もあります。この場合、模様以外の部分の布の裏も固く締め付けられるので、更に柵文様とは別に模様が現れます。



糸を切らずに通して縫った作品

藍染めのしかたについては、立涌や、大樹の紋りと同様です。

この紋りは前に紹介した立涌や大樹の紋りの様に一反分の布を端から端まで縫い通す必要が無く、部分部分を縫って絞ればよいので比較的楽なしぼりです。しかし、絞りやすく利用しやすい模様なのですが、なぜか講習会では取り組む人が少ない紋りです。

これまでに紹介した鹿角の紋りの意匠の他に花輪と呼ばれる意匠がありますが、これは布を二枚合わせて絞るやり方とは異なる、ごく普通の一枚紋りです。鹿角の花輪の地名にちなんで絞られたものと思われます。

